シイラ　*Coryphaena hippurus*

雄の成魚は頭部の前方、額の部分が前に張り出し、独特の外観を示します。県内では単にシイラと呼ぶほか、トーヤク、クマビキ、マンビキなどと言う場合もあります。漢字では鰺と書くように、旬は初夏から夏で、刺身、焼き物のほか、塩干品や練り製品などにも加工されています。高知の夏を代表する食用魚の一つで、近年はブランド化も推進されています。遊漁の対象としても人気があります。

生物特性

シイラは全世界の熱帯から温帯海域に広く分布しています。日本近海では初夏から盛夏にかけて北上し、初秋から晩秋にかけて南下するという季節回遊をします。1 歳で尾叉長 38cm、2 歳で 68cm、3 歳で 90cm、4 歳で 108cm、5 歳で 122cm に成長すると推定され、最大で 175cm まで成長します。尾叉長 60cm をこえると成熟します。流木や流れ藻などの漂流物につくという習性があります。

県内の漁獲動向

高知県内におけるシイラ漁獲量は昭和 30 年代以降に上昇傾向を示し、昭和 62 年（1987 年）に 3,945 トンのピークを迎えました（図 1）。その後は減少傾向に転じ、平成 5 年（1993 年）以降は 1,000～2,000 トンの間で推移しています。

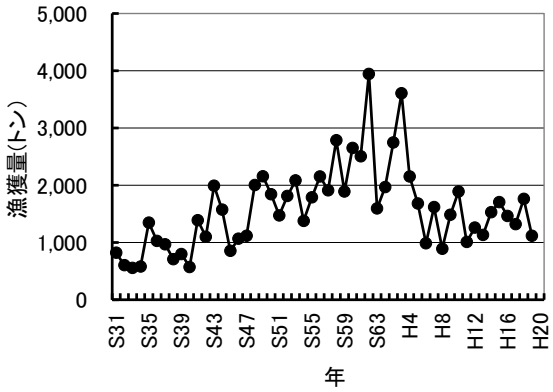

図 1　高知県下におけるシイラ漁獲量の推移.

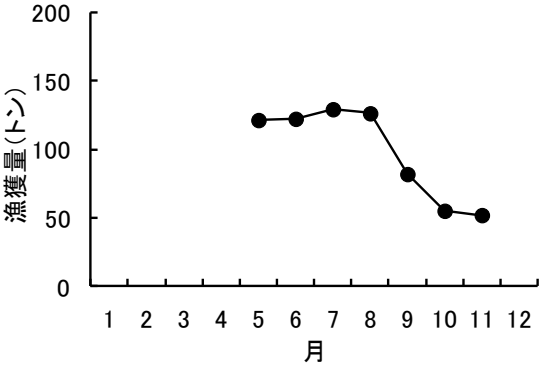

図 2　手結漁協と興津漁協の漬けまき網によるシイラの月別漁獲量. 平成 11 年～平成 20 年の平均値で示す。5 月～11 月について示す.

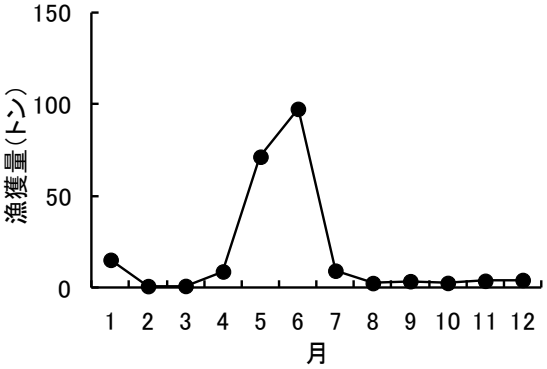

図 3　高知県漁業協同組合所属の大型定置網によるシイラの月別漁獲量. 平成 21 年 4 月～平成 23 年 9 月の平均値で示す.

土佐湾では、シイラが流木につく、という習性を利用したシイラ漬けという漁法で多く漁獲されます。これは、長さ 10mほどの竹を束ね、シイラが来遊する海域に設置して、集まったシイラを網で漁獲するというもので、県東部の手結や県西部の興津を中心に行われています。漁期は 5～11 月で、5～8 月に多く漁獲されます（図 2)。漁期の初めには大型魚が多く、8 月以降は中・小型魚が主体となり、漁期の終わりには再び大型魚が混じって漁獲される傾向があります。

本種は、シイラ漬けのほかに、各地の定置網や曳き縄でも漁獲されます。定置網では春から初夏にかけて多く漁獲されます（図 3)。